

J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲 第1番

J. S. バッハの《無伴奏チェロ組曲》（全6曲）が書かれた年代については、ケーテンの宮廷楽長時代（1717～23）の前期と推定されている。各組曲は、定型である「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード（前奏曲）」を、最後のジグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴォット／ブーレ」のなかからいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

第1番は、ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。第1曲プレリュードは本組曲中もっとも有名な楽章で、間断なく続く16分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第2曲は安らぎに満ちたアルマンド、第3曲はイタリア型の急速な3拍子によるクーラント、第4曲は優雅なサラバンド、第5曲には2つのメヌエットが用いられている。そして第6曲の軽快な短いジグで曲を閉じる。

カサド：無伴奏チェロ組曲

カタルーニャの州都バルセロナに生まれたガスパール・カサドは、同郷のパブロ・カザルスに見出されたチェロ奏者・作曲家。本作は1926年に作曲され、師カザルスに献呈された。

3つの楽章からなり、第1楽章冒頭から、カタルーニャの濃い情緒を感じさせる。頭上に広がる青空、灼けつく陽ざし、そこに去来する憂愁と孤独の心象が、余すところなく表現されている。第2楽章の「サルダーナ」とは、カタルーニャ地方の伝統的な舞踊で、ギリシャに端を発しているという。第3楽章は、ギターを爪弾くようなインテルメッツォに続いて、抑えきれない情熱があふれ出すかのように、ダンツァ・フィナーレを迎え、最高潮となって曲を締めくくる。その静と動のコントラストが見事である。

J. S. バッハ：無伴奏チェロ組曲 第2番、第6番

第2番の二短調という調性は、音楽を内省的な方向へと導く。第1曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重点が置かれている。第2曲は高度な技巧が要求されるアルマンド、第3曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第4曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なる典雅なサラバンド。第5曲の2つのメヌエットでは、主調の第1メヌエットが二短調、第2メヌエットが二長調となり、古風な響きを醸す。終曲のフランス風ジグは、規則正しい8小節の楽節構成。

第6番は、本来5弦チェロ（高音側にE線が追加された）のために書かれており、通常のチェロでは演奏が困難とされるが、技巧的にも内容的にもスケー

ルが大きく、充実した作品である。第1曲は、2本の弦にまたがって同音高を弾くなど、弦楽器ならではの可能性が試された難度の高いプレリュード。第2曲は、美しい陽光が射し込むような抒情的なアルマンド。第3曲は、軽やかさが心地よいイタリア型クーラント。第4曲のサラバンドでは、重音の合間を縫うように紡ぎ出される旋律が美しい。第5曲は、素朴な舞曲的雰囲気を持つガヴォット。第6曲ジグは、様々な音型が見事に組み合わせられており、これをもって本組曲のフィナーレとなる。